

ベルクソンの形而上学

鈴 木 幹 雄

① 形而上学とはなにか。それは「哲学」と同じなのか、違うのか。哲学史を振り返っても一義的な定義はできそうもない。この問題を考えるには、まず、個々の哲学者について、彼がそれをどう考えていたかを具体的にみていくしか手がないように思われる。ここではフランスの哲学者ベルクソン（一八五九—一九四二）の場合をとりあげてみよう。

② ベルクソンは、「形而上学」という語をかなり自覚的に用いている。彼がその「形而上学入門」を発表するのは一九〇三年である。それまでに彼はすでに『意識

に直接与えられているものについての試論』（邦訳名「時間と自由」、一八八九）と『物質と記憶』（一八九六）を発表し、その独自の哲学的方法を確立していた。いまや彼はその名著『創造的進化』（一九〇七）に結実する探求の最中にあり、やがて一九一五年には『道徳と宗教の二源泉』（一九三二）を準備しつつ、自己の哲学を「形而上学を経験の領域にまで導きいれ」るものと呼んでいる。「形而上学入門」は表題から予想されるような、初心者向けの哲学への手引きではなく、哲学専門誌『形而上学・倫理学評論』に掲載された、形而上学としてのベルクソン哲学の自己主張にほかならない。だから、これはベルクソン哲学への恰好の入門書であり、またそのようなものとして読まれてもきたのである。だがそのために、それがベルクソンの「形而上学」への入門であることが等閑に付され、単にベルクソン哲学への手引きとみなされてきてしまったのである。だから、それがなぜ「入門」なのか、そして、その門のうちにある「形而上学」がいかなるものなのか、その二点を確かめておかななくてはならない。

③ 「形而上学入門」はベルクソン哲学の発展のなかでどのような位置にあるのか。『試論』は持続する自我を意識に直接与えられているままに確認し、記述している。デカルトと対比して言えば、彼は「考える我」ではなく、「持続する我」を實在として確認したのである。『物質と記憶』では、物質が實在として認識され、物質と精神の関係が解明されることになる。では、このような物質と精神の関係はどのようにして産み出されたのか。この問いが『創造的進化』のテーマとなる。その問題を究明しながら、ベルクソンは自己の哲学を形而上学として規定したのである。

④ 「形而上学入門」の論述はほぼ三つの部分に分けられる。最初にまず、対象を認識する二つの方法が対比的に提示される。一つは、分析と記号的表現を本質とする科学の方法である。他は、直観によって対象のうちに入りこみ対象と合致する形而上学の方法である。次いで、直観によって認識しうる対象、直観によってしか認識しえない一つの實在が指示される。それが、『試論』によって確認された自我の持続である。絶えず変化しつつ自

己同一性を保持する自我の独自の在り方、それは言葉という記号では言い表わせないこと、直観によってしか把握できないことが様々な例をあげて説明される。そして最後に、「外的ではあるが、しかしわれわれの精神へ直接に与えられた」もう一つの実在、つまり物質がとりあげられる。デカルトは物質を延長と定義したが、ベルクソンはそれを「動性」と規定する。だが、物質の認識は大まかに素描されただけで、詳しい説明は省略されている。つまり、ここでベルクソンは、先行する研究の成果を一般化し、認識の方法とそれの二つの實在への適用を述べ、伝統的に「実体」という語で示されていた対象を「實在 *réalité*」という概念で表し、その實在の認識を形而上学と呼んだのである。

⑤ ところで、このような論述の構成はデカルトの形而上学の書『省察』の内容とほぼ正確に対応していると、言うてよいだろう。デカルトにとって、形而上学は哲学の第一の部分であり、第一哲学とも呼ばれる。その第一哲学の省察の内容は、真理へ至る方法としての懐疑から、「考える我」としての精神の確認、神の存在の考察を経

て真理の基準（明晰・判明）を提示し、実体としての物質の存在の確認で終わっている。物質の具体的解明は、デカルトにあつては、自然学（『哲学原理』）に委ねられているから、デカルトの形而上学は物質の存在の提示で終わっているのである。その点で、ベルクソンの形而上学はデカルトの（したがって伝統的哲学における）形而上学と同じだと言えるだろう。

⑥ だがそれならなぜ、ベルクソンは自分の小論文に「入門」の語を付け加えたのか。哲学の初心者への配慮から、形而上学の概略を易しく説明しようとしたからなのか。掲載雑誌の専門性、内容の難解さ、素描された物質論（物質⇨動性論は『物質と記憶』の物質⇨イマジユ論の言換えてはない）から考えてそうは思えない。むしろ、「入門」は言葉通り、これから目指すべき形而上学、ベルクソンが「創造的進化」という観念を中核にして構想している形而上学への出発点の意味ではないのか。つまり、やがて『創造的進化』と『二源泉』に展開される哲学が、門のうちに見ることになるはずの形而上学なのである。

⑦ デカルトにとつて、形而上学と自然学との違いは思考と延長との実体上の区別に基づいている。物質的世界は精神とは別の原理に従つて生成変化するのである。

しかしベルクソンにとつて、世界は生命によつて生み出された生命体（有機体）を含んでいる。それを精神と物質という二つの實在の動的関係から理解しようとするならば、その理解は實在の動性に沿つた仕方ではなされなくてはならない。世界を機械論的に外から見るのでなく、生命の働きに寄り添つて理解する、それが形而上学であり、『創造的進化』の課題と方法なのである。こうしてベルクソン哲学は世界を創る實在の認識として形而上学となり、ルクレティウスやプロティノスを彷彿とさせる宇宙論の形態をとる。その後の探求は、一九一一年の講演「意識と生命」に示唆されているように、生命進化の方向を見定めることに向けられる。『二源泉』はそれを神的人間の深い宗教体験とそこから創造される道徳的行為のうちに探ろうとする。神的人間たちは、深い神秘的体験において生命の創造的はずみ（*élan*）に触れ、感動的な模範的行為を生み出すのである。

⑧ 「宇宙は神々を産み出す機械」、これが『二源泉』の結びの言葉であり、それがベルクソンの形而上学の結論となる。「形而上学入門」は、その結論に至るはずの三〇年に及ぶ探求の、決して研究計画表ではなく、確かな方法をもって事実の領域に踏み出す旅立ちの宣言なのである。とは言え、この宇宙論的形而上学は、本当に事実の検証に耐えるのだろうか。人間を越えて進む生命進化の線上に人間を位置付けるこの形而上学は、どのような「実在」に足場を求めているのだろうか。慎重な検討が必要であるように思われる。

(本学教授 倫理学)

〈キーワード〉直観、実在、生命

東北淪陷期文学の一側面

——疑滞が描いた「満洲国」を中心に——

李 青

一、はじめに

淪陷期文学の名称は中国で使われている言い方で、研究対象は主に中国人文人による中国語で創作された文学作品、または中国文人が結成した文学団体のことを指す。東北淪陷地域の場合は当時五族（日本、満洲、漢、朝鮮、ロシア）協和という建国理念を掲げたため、中国の漢民族や少数民族のほかに、日本人の在住者はかなりいたという特異性があった。日本文学者の活動は活発で、文学の実績も多く残った。日本では（戦前も戦後も）「満洲国」時代に発生した文学を一般的に「満洲文学」という。中国では八〇年代後半から「満洲国」に生きた作家た